

【2020年2月5日発行】

THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES
日本国際文化学会ニューズレター44号
<http://jsics.org/>

日本国際文化学会事務局

多摩大学
グローバルスタディーズ学部事務室内
〒252-0805
神奈川県藤沢市円行802番地
Tel: 0466-82-4141
Fax: 0466-82-5070
Email: jsics@gr.tama.ac.jp

2020年度 第19回全国大会に向けて

第19回全国大会 実行委員長 高橋 梓
(近畿大学法学部)

2020年度日本国際文化学会第19回全国大会を近畿大学で開催させていただくこととなりました。実行委員長を務めます高橋を始め、若手教員が中心の運営となりますが、これまで日本国際文化学会で学んだ恩を返すべく、誠心誠意努めて参ります。

国際情勢が混迷を極めた2010年代を抜け、いよいよ2020年代の幕が開きました。本大会では2010年代に改めて直面することとなった個別主義・普遍主義の問題を議論したいと思います。グローバリズムが席捲する中で、ナショナリズムを希求する勢力が力を強め、世界は新たな局面に突入しつつあります。この時代に立ち会った我々は、有史以来の文化を広く見つめ、2020年代を迎えるための〈ことば〉を互いに紡いでいかねばなりません。

公開シンポジウムでは、人類が築き上げた文化的遺産である文学・思想・歴史・映画を切り口として、個別主義と普遍主義の錯綜について議論したいと思います。多くの方のご参加をお待ちしております。



第19回全国大会 開催要領

開催日時： 2020年7月11日(土)～12日(日) ※7月10日(金)エクスカージョン
開催大学： 近畿大学法学部 (東大阪キャンパス)

【大会会場への交通アクセス】

〔JR新大阪駅から〕 (JRおおさか東線)→「JR・近鉄俊徳道駅」→(近鉄大阪線)→「近鉄長瀬駅」下車 (約50分)
〔JR大阪駅から〕 (JR大阪環状線)→「JR・近鉄鶴橋駅」→(近鉄大阪線)→「近鉄長瀬駅」下車 (約35分)
〔大坂伊丹空港〕 (リムジンバス)→「近鉄大阪上本町駅」→(近鉄大阪線)→「近鉄長瀬駅」下車 (約60分)

【大会日程】

【7月11日(土)】

09:00～ 受付
10:00～12:00 自由論題I
12:15～ 昼食・大学院生交流会
12:15～13:15 常任理事会・理事会
13:20～15:20 共通論題I
15:30～16:30 基調講演
16:45～18:15 公開シンポジウム
18:30～20:00 情報交換会

【7月12日(日)】

08:00～ 受付
09:00～11:00 自由論題II
11:00～ 昼食
11:10～12:50 総会・平野健一郎賞表彰式・ICCO発表会
13:00～14:30 フォーラム
14:45～16:45 共通論題II

※自由論題の採択数等によりスケジュールが多少変更されることがあります。

個別主義の壁、普遍主義の壁——2020年代を切り開く〈ことば〉

「国際文化」には、「普遍化」を志向する「国際」と、「個別化」を志向する「文化」の二語を内包しています。この二方向の力学は2010年代の世界において激しい対立となって表出していると言えるでしょう。実際、我々は自国第一主義がグローバリズムと衝突を繰り返す時代に立ち会っています。右派ポピュリズムの排他的な態度に対しての批判的言説や抗議運動が際立つ一方で、過度に開かれた画一的な社会への抵抗が繰り返されていき、両者の対立

は容易に解消することはありません。

2020年を前にした我々は、世界中が様々な形で分断される様を目にしています。個別主義の壁、普遍主義の壁を前に、我々はどのような〈ことば〉を紡ぐべきでしょうか。この問いは「国際」と「文化」の二方向の力学を考察対象とする国際文化学が抱える課題であると言えるでしょう。第19回全国大会での議論を通じ、2020年代を迎える国際文化学のあり方を再検討できれば幸いに思います。

共通論題の発表タイトル

※順不同。タイトルは仮題を含む。発表者は代表者のみ明記。

- ・共通論題①「東南アジアの映画は家族をどう描いてきたか」
代表者：山本博之(京都大学 准教授)
- ・共通論題②「視覚化された資料：表象をとおして読み取る交流関係とその資料的意義」
代表者：深松亮太(常磐大学人間科学部 助教)
- ・共通論題③「国際文化学の教育方法としてのスタディツアー
—『知識』から『現実感を伴った知性』への転換のために—」
代表者：坂口可奈(北海商科大学商学部 講師)
- ・共通論題④「社会的分断の時代における政治コミュニケーション—国際協力活動に焦点を当てて」
代表者：湯浅拓也(青山学院大学国際政治経済学研究科国際政治学専攻 博士後期課程)
- ・共通論題⑤「視覚化された資料—表象をとおして読み取る交流関係とその資料的意義」
代表者：鈴木裕輔(名城大学外国語学部 准教授)

《宿泊先》

宿泊に関しては各自でお願いいたします。近畿大学周辺にはホテルがありません。東大阪市内であれば布施・河内小阪の周辺、大阪市内であれば大阪上本町・難波の周辺が本学にアクセスしやすく便利です。

《大会参加費・大会申込》

大会参加費と振込先については、今後ニュースレター等でお知らせいたします。

《エクスカーション》

大会前日の7月10日(金)に橿原市・明日香村を巡るエクスカーションを開催する予定です。古墳や寺社を鑑賞しながら、古代と現在とのあいだに連続性を見出すことを試みます。詳細はニュースレターや学会ホームページでお知らせいたします。

《大会事務局》

大会実行委員長：高橋梓(近畿大学法学部)
連絡先住所：〒577-0813 東大阪市新上小阪228-3 EキャンパスC館5J
近畿大学法学部 高橋梓研究室気付
連絡先メールアドレス：intercultural_2020@jus.kindai.ac.jp

2020年度ICCO短期集中セミナーについて

ICCO(文化交流創成コーディネーター資格認定制度) 運営事務局長
松居 竜五 (龍谷大学)

2020年度のICCO短期集中セミナーについて、下記の要領で開催したいと考えています。関係のみなさま方にはご確認を、お願いいたします。

期間:2020年8月23日(日)~8月29日(土)
会場:龍谷大学深草学舎(京都市伏見区)
宿泊:龍谷大学学生支援施設(仮称)
参加費:30,000~36,000円
参加申請期間:2020年4月1日(水)~5月31日(日)

セミナー自体の会場は、龍谷大学深草学舎を用いており、2019年度と変わらないのですが、今年度は宿泊場所として深草学舎前に新たに建設中の施設を予定しています。現時点でこの施設の運用について決定していないために、参加費が設定できずご迷惑をおかけします。早急に調整したいと思います。

今年は東京五輪があるために、夏の状況が読めないところがあります。ちなみに上記の今年度の実施期間は、パラリンピックの日程と重なっています。参加校のみなさま方には、ICCO資格に関心を持っている学生に対して、このセミナーの意義についてご説明いただき、例年以上に強く参加を促していただければ幸いです。

その際、ちょっとお願いしたいことがあります。昨年度のセミナーは、10大学から総勢29名の参加があり、たいへん大きな盛り上がりを見せました。ただ、ちょっと残念だったのは、学生の提案するフィールドワークのテーマが、「観光都市としての京都」にかなり偏っていたことです。前二回の京都開催の際には、もう少しテーマ設定に広がりがあったので、年々「京都」というイメージのステレオタイプ化が進んでいるようです。

実際には、セミナーの活動の拠点となる深草は、京都以外の関西の地域、つまり大阪の各所や、大津、奈良などにも1時間以内で行ける場所です。また京都と言っても、祇園や清水寺(たしかに便利で20分以内で着きますが)界限だけでなく、大原や宇治といった郊外も格好のフィールドワークの候補地です。

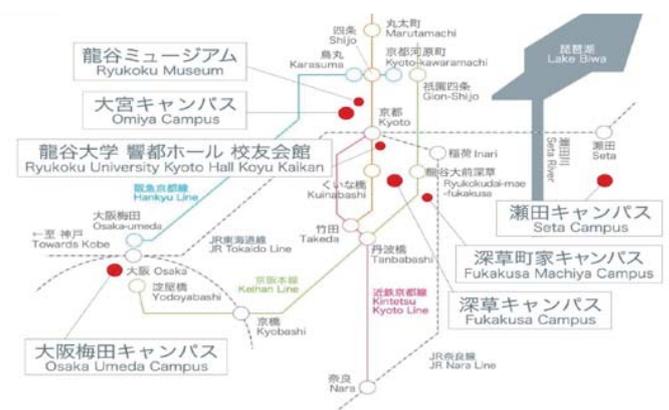
さらに、テーマとしても「観光」は目に付きやすいですが、千年以上の時間の中で繰り広げられた明暗相半ばする歴史を知らなければ、現状を理解することはできません。また、さまざまな社会・文化問題を幅広く、複

合的にとらえることで、フィールドワークの内容も深く効果的なものとなると考えられます。そのためには、申請の前に、関西地域の歴史や現状に関する本を読んだり、ニュースを注意深く集めたりすることが必要となります。

もちろん、こうしたことはセミナー開始後に、学会員の方から学生にアドバイスをすることで、共有していける部分もあります。昨年夏のセミナーでも、学会員との相談の際に当初の計画を立て直し、大阪のコリアンタウンや京都の新しい社会現象の取材をおこなったグループがありました。

しかし、申請の時点で個々の学生が立てたプロジェクト案は、やはり実際のセミナーでの活動の基礎になるものです。その時点で、申請の際に関連の知識と広い視野を持った上で計画を立てられていると、セミナーでの学びは格段に豊かなものとなり、フィールドワークの可能性も大きく広がると考えられます。

こうした点について、事務局としても、事前に情報を提供できるような試みを行っていきたいと思います。とは言え、やはり一番大きな影響力を持つのは、実際に日頃指導に当たっておられる学会員の方々のアドバイスだと思います。ぜひ、こんな発想もある、あんな見方もある、というお話を参加希望の学生にさせていただいて、それがセミナーの活性化につながることを期待したいと思います。



この地図のほぼ全域が
龍谷大学深草学舎から
1時間以内で行ける場所です

【龍谷大学深草学舎】

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67 代表TEL:075-642-1111/FAX 075-642-8867

交通アクセス JR奈良線「稲荷」駅下車、南西へ徒歩約8分/京阪本線「深草」駅下車、西へ徒歩約3分

京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋」駅下車、東へ徒歩約7分/最寄りのバス停:龍谷大学前

チェコ研究から国際文化学へ、 視野の広がり求めて

東北大学大学院国際文化研究科の博士課程に籍を残したまま、地元の私立大学で英語の非常勤講師をしています。日本国際文化学会には2017年に入会し、同年7月に宮崎公立大学で行われた全国大会の自由論題で発表させていただきました。

入会のきっかけは、前年10月に研究科の人文系の学生及び研究員の有志で立ち上げた研究会(東北大学国際文化研究会)でした。研究会は、それぞれの研究室の垣根を超えて学生主体で様々な意見を自由に交換し合い、相互に学術的刺激を得たいという数名の有志の思いから始まりました。研究会立ち上げに携わったメンバーの研究テーマは、地域(アジア、アメリカ、ヨーロッパ、日本など)も分野(政治史、国際交流史、民俗学、メディア史など)も異なっており、共通する点がほとんどありませんでした。そうしたなか、お互いの知的好奇心を刺激し合う議論をするために共通するテーマは何かと考えたときに浮かんだのが、「国際文化」でした。

小林文生先生にアドバイザーとしてのご参加をお願いして、平野健一郎先生の『国際文化論』を課題図書とする読書会を行い、「国際文化」への理解を深めるべく活発に議論を重ねました。小林先生は、当時、本学会の会長でもあり、深く関わっていらっしゃったことから、本学会の動向についても詳しく教えていただきました。そこで、研究科内での議論だけでなく、より視野を広げるためにも、全国規模で開催されている日本国際文化学会に飛び込んでみようと思うに至りました。

私が修士課程から現在まで継続して行っている研究テーマは、ミレナ・イエセンズカー(1896-1944)という両大戦間期チェコのジャーナリストのジャーナリズムです。イエセンズカーは、フランツ・カフカ(1883-1924)が送った大量の手紙(『ミレナへの手紙』として既刊)の受取人



チェコ共和国国民図書館(Národní knihovna České republiky)一般閲覧室にて資料調査時撮影

半田 幸子

東北大学大学院国際文化研究科



日本国際文化学会第16回全国大会参加時、
宮崎公立大学正門にて

「ミレナ」と同一人物です。彼女の伝記は邦訳も出版されていますが、ジャーナリズムに関しては、とりわけ日本ではほとんど研究されておらず、私自身、悪戦苦闘しながら、この研究を「比較文化論」を冠する研究室で、「比較文化論」の枠組みのなかで行ってきました。

この研究は、チェコという、日本からは遠方の地域に関する研究であるため、日本においてはチェコあるいは中欧という地域研究の枠組みで検討する方が理解されやすいかと思います。あえて「比較文化論」や「国際文化学」という枠組みでも検討したい理由は、当時のチェコが多民族社会であったという民族的背景や、大国に四方を囲まれたチェコスロヴァキアという小国が常に他文化との接触を避けられない状況にあった(ある)という地政学的背景に加え、イエセンズカー自身がチェコ人でありながらユダヤ人との親交が多く、またウィーンやベルリン近郊にも居住し、他文化との接触を多く持つ一地域を超えた存在だったということが挙げられます。「国際文化」においては、チェコのような小国の問題は比較的見落とされがちのように思われますが、多民族社会にあって政治的にも不安定で多くの問題を抱えていた両大戦間期のチェコの女性ジャーナリストの言説を読み解くことは、グローバル化が急速に進む現代を生きる私たちにとっても、問題解決のための新たな知見となりうるのではないかと考えています。

日本国際文化学会では以上のような意識のもと、小国チェコの視点を「国際文化」という枠組みのなかで読み解き、発信していけるよう、研鑽を積んでいきたいと考えております。また、博士論文提出後には、現在携わっている英語教育という点からも「国際文化」と向き合っていきたいとも考えております。今後ともよろしく願いいたします。

「ディアスポラ」研究者の原点回帰

私の個人研究テーマは「伝語圏を中心としたマイノリティの生存戦略研究」で、修士・博士課程ではフランスのアルメニア人コミュニティに関する研究を行いました。その後科研費のおかげで研究フィールドをフランスの地域語自主教育学校、次いで伝語圏におけるムスリム学校の建設と運営、そして今では世界における通称「ギョレン運動」による学校建設運動の調査研究にまで広がっております。

大学ではフランス語を中心に教えております。とはいえ、大学入学当初はフランスにそれほど興味があるわけでもなく、フランス語選択ですらありませんでした。中学生のころに東欧革命が起き、その時に東欧の様々な国に触れたのがきっかけでロシア語を勉強し、旧ソ連や東欧の社会について勉強したいと思っていました。その流れで大学2年の時に旧ソ連の小国アルメニアに興味を持ち、次いで世界中に存在するアルメニア人ディアスポラに興味を惹かれることとなります。とはいっても20年前、日本には専門書どころか概説書すら片手で数えるほど。方々の洋書店に発注したものの色好い返事はなし。そんな中一冊だけ専門書が届きます。フランスのアルメニア人コミュニティに関するものでした。この本が私の疑問に答えてくれそうだ・・・しかしフランス語。無謀にも私はこの本を読むために修士2年、23歳からフランス語を独学で学び始めます。3ヶ月で一通りの文法をほぼ腕力で学び、その本を読みましたが、当然のごとくそれだけで事足りるわけではなく、結局提出を1年延ばし思い切ってフランスに資料収集へ。フランス人ですらその存在をあまり知らない当時、フランスのアルメニア人のことを調べに日本人学生がやってきた、という物珍しさから、調査先の

マルセイユで地元の新聞に私の記事が掲載されました。こうして私のフランス語を中心とした研究が始まるわけです。

松井 真之介

神戸大学大学院国際文化学研究科
国際文化学研究推進センター協力研究員



2019年3月、パリ郊外のイスラーム系私立学校調査訪問にて。

博士修了後、運良くフランス語教師の仕事にありつき、「フランス(語)で飯を食う」生活が始まります。しかし、フランス語プロパーでないという後ろめたさは常につきまといま。知見と人脈を広げるために伝語教育の研究会の門を叩き、そこで本学会員の高橋梓氏に出会います。大学教育におけるフランス(語)、ひいては教養教育のプレゼンス低下に一石を投じたいという共通の問題意識から意気投合し、ここから「松井さん、この問題に関して一緒に日本国際文化学会で発表しませんか」とのオファーを受けます。それから2年後の19年7月、奇しくも私の故郷長崎で「国際文化としてのフランス文化教育」と題して共同研究発表を行うことができたのです。

伝語教育がきっかけで本学会に入り、デビュー戦の共同発表はこのように国際文化と大学教育と、個人研究テーマからは少し離れたものでしたが、他の会員の方の研究をみると私の個人研究テーマに近い研究やアプローチをされている方が多いようで、興味深さはもちろんのこと、非常に居心地の良さも感じました。現在の研究テーマの「ギョレン運動」はもはやフランスは関係ない部分も多く、調査フィールドもフランス語圏以外ではアルバニア、ルーマニア、ブルガリア、ジョージアなど、奇しくも私が大学時代に興味を持っていた国が多く、この点でも本学会では受け入れていただけそうな期待があります。伝語業界でディアスポラ生活を送っていた私は、原点回帰とともに、本学会によろやく安住の地を見つけるのかもしれませんが。みなさま、今後ともご指導とご鞭撻のほどどうぞよろしくお願いいたします。



初の渡仏調査(2000年、アルメニア人コミュニティ)にてマルセイユの地元紙『ラ・マルセイエーズ』に掲載された記事。

【募集】全国大会の自由論題

- 自由論題は原則として個人研究発表ですが、内容により複数の発表者による発表も可とします。いずれも発表時間は質疑応答も含めて30分とします。質疑応答の時間が十分とれるよう、発表時間の目安を20分程度としてください。
- 応募は日本国際文化学会の会員に限ります。ただし現在学会会員でない方は、申し込みと同時に会員登録を行うことにより資格を得るものとします。
- 応募は、氏名・現職(大学教職員・有識者・企業や団体・研究所等の場合は所属と肩書き、大学院生・学生の場合は在籍課程などを明記)・連絡先・自由論題発表題目・キーワード(3~5語)を冒頭に記し、発表要旨(40字×25行以内)をつけて、**2020年3月20日**までに全国大会実行委員会事務局までメールにて提出をお願いいたします。 Eメール: intercultural_2020@jus.kindai.ac.jp

【募集】第10回平野健一郎賞

「第10回平野健一郎賞」の募集を開始しますので、多数のご応募をお待ちしております。応募に関しては学会ホームページの「平野健一郎賞規程」をご覧ください。
(<http://www.jsics.org/hirano.html>)

- 応募締め切り:2020年4月30日
- 応募書類:応募書類は審査後に返却いたします。
- 応募結果の発表:第19回全国大会総会において発表し、授与式を行います。
- 応募先:日本国際文化学会事務局宛
〒252-0805 神奈川県藤沢市円行802番地
多摩大学グローバルスタディーズ学部
TEL:0466-82-4141 Eメール: jsics@gr.tama.ac.jp

会費納入のお願い

- 年度末が近づいてまいりました。2019年度の会費納入がまだの方は、お振込みをお願いいたします。
- 振り込み用紙がお手元にない場合は、郵便局のお振込み用紙をご利用ください。その際、ご所属・連絡先・お支払の会費年度のご記入をお願いいたします。

- 学会会費(4月~翌3月末までの年度会費額)
正会員 10,000円
大学院生 5,000円
学部生 2,000円(学会誌は別途購入)

【振込先口座番号】

ゆうちょ銀行 00210-2-138408
日本国際文化学会

※平成25年度総会により、年会費(10,000円)の支払いに困難を覚える者は、常任理事会宛に会費の減額(5,000円)を申請できることとなりました。希望者は、学会事務局まで理由書をご提出ください(書式自由)。

会費の未納・滞納は、学会運営に大きな支障をきたします。何卒ご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

※他行等からの振込先口座番号は下記のとおりです。恐れ入りますが、振込手数料はご負担ください。

ゆうちょ銀行
店名:〇二九(ゼロニキュウ)店(029)
当座 0138408

学会事務局より

- 「若手研究者紹介」への記事を募集します。

本「ニューズレター」にて連載中の「若手研究者紹介」に掲載を希望される方を募集します。お問い合わせは学会事務局までお願いいたします。
(学会事務局Eメール: jsics@gr.tama.ac.jp)

- 訂正

「ニューズレター」第43号(2019年10月25日発行)の記事に訂正があります。
・12ページ左列「自由論題H」の発表要旨
《誤》Clark & Clark 1979→《正》Pustejovsky 1995